

氏 名 歌代 公司

○視察都市： 青森県 黒石市 令和 7 年 7 月 23 日（水）

○視察項目 ・「重伝建維持に関する補助制度及び概要と特徴」
について

所 感

初めに、このような貴重な視察の機会に同道させていただいた
一心会の皆さんに心底よりの感謝を申し上げたい。

重要伝統的建造物群保存地区に設定されている黒石市の「中町
こみせ通り」には、積雪期でも地域住民の生活路が確保できるように
江戸時代に整備された“こみせ”と呼ばれるひさしが残されている。

この通りのシンボルでもある「松の湯交流館」では、350 年以上の
樹齢を持つ松の巨木が屋根を突き破るように屹立している。その
太い幹からは、地域住民の「雪に耐える強さ」が伝わってくるようで
あった。

この建物の一部では、子どもの学習スペースが設けられており、
伺ったときにも小学生、中学生が静かに勉強をしていた。裏の蔵は
カフェとして営業をしているとのことであった。

運営ボランティア、カフェのお客、畳の部屋で自習している子どもたち、と、世代を超えた市民たちが日常使いしている建物が重伝建地区にあるのは、建物にも通りにも血が通い続けている感じがした。

そのすぐ近くにある「第三消防屯所」は、大正 13 年の建設だが今も消防団詰所として活用され続けている。観音開きの扉を開けて、中にあるポンプ車も拝見することが出来た。驚いたのは、この 50 年以上前に導入されたポンプ車が現役であるということである。地元の方や消防団の理解、そして不断の努力無くしては維持できないものであろう。街並みと歴史に対する市民の誇りが伺い知れた。

そのような地域でも、「お金をかけて不便な家を維持するよりも、便利なものに立て替えたい」という人たちも複数おられるという。日々の生活を考えれば無理からぬことであり、担当者の方の「個別の家の事情を理解することから始めないと重伝建は維持できない」という説明には、重伝建維持のための困難さが滲んでいた。重伝建の維持にかかる費用は当然ながら時間が経つほど高額になる。

当局には、これまでも増して国の財政的支援の拡充を要望し続けていただきたい、とあらためて実感した視察であった。（了）